

早稲田大学大学院教育学研究科

博士学位申請論文

〔概要書〕

話し言葉における
ハダカ名詞のあり方とはたらき

荻宿紀子

2013年10月

序章

1 研究の目的

本研究の目的は話し言葉における「ハダカ名詞」のあり方を記述し、話し言葉において「ハダカ名詞」がどのようなはたらきをしているのかを探ることである。

話し言葉では「わたし、帰るね」「学校、行ってくる」「これ、あげる」のように、名詞と述語とが格関係を有するときに名詞が助詞を伴わずにハダカで現れる現象、いわゆる「無助詞」現象がしばしばみられる。ハダカ名詞は書き言葉にはほとんど現れることはなく、話し言葉において特徴的な形式である。書き言葉と話し言葉の違いを考察し、話し言葉のしくみを知る上で重要な現象であると考えられる。また、ハダカ名詞と有助詞名詞とで意味が違うのであれば意味論的にも重要な現象である。従って、いわゆる「無助詞」現象についてはこれまでも多くの先行研究で論じられてきたが、助詞の使用の可否には、種々の要因が関わっており、「ハダカ名詞」になる条件は未だ明らかになっていないようである。

ハダカ名詞は話し言葉に多い現象だが、そのわりには、ハダカ名詞の「談話」におけるあり方やはたらきについては未だに論じられていない。ハダカ名詞が文の中でどのような機能を果たしているか、どのような文でハダカ名詞となるのか、という構文レベルの分析は多くの先行研究で論じられている。しかし、ハダカ名詞が話し言葉に多い現象であるならば、ハダカ名詞の文の中でのあり方やはたらきの考察にとどまらず、談話レベルでハダカ名詞がどのようなあり方をし、またどのようなはたらきをしているのかを考察しなければ、その本質には迫れない。

本研究では既存の話し言葉コーパスを用いて、調査・分析を行い、ハダカ名詞がどのようなときに出現しているのか、そして、談話においてどのようなはたらきをしているのか、実際の現象を記述する。ハダカ名詞のあり方とはたらきを明らかにすることから、話し言葉のしくみについても考察し、書き言葉と話し言葉とで異なる形式を用いる時に、どのような要因が働いているのかということについても考えたい。

2 ハダカ名詞に関する先行研究とその問題

ハダカ名詞の先行研究の中で、「意味・機能」を中心に論じているものは大きく分けて3つに分けられる。尾上(1987)、尾上(1996)は、助詞がない形式でしか表せない領域を探る研究である。丸山(1995)、加藤(1997)は、助詞がない形式について、助詞を補った場合に意味が変わるかどうかは考えずに助詞がない形式は助詞がない形式として扱い、その格関

係を探っている。長谷川(1993)、黒崎(2003)は、助詞がない形式について独自の機能をもつものと、単なる助詞の省略であるものを分けて考察している。前節までに挙げた先行研究以外にも多数の先行研究があり、「意味・機能」を論じた先行研究は多いが、これまでの先行研究でわかったことをまとめると以下の通りである。

- ①助詞がない形式が現れる格はガとヲと「ニの一部」である。
- ②話し手や聞き手を表す名詞、現場指示の指示詞が使われた名詞など現場にあるものを表す名詞が主題の場合、「無助詞」となる。
- ③②の場合、ハの対比、ガ(その他の格助詞)の排他的意味を表さないために「無助詞」となる。
- ④新たな話題を提示する場合、「無助詞」となる。

これまで行われてきた構文レベルの分析は種々の文と一緒に扱われていたが、条件をそろえて分析した方が、ハダカ名詞の出現要因を明確にできると考えられる。談話レベルの分析における、談話中での出現位置や、談話レベルでの機能については詳しく論じられておらず、話し始めのきっかけのために用いられている【例 1】のようなものについては分析されていない。

【例 1】 6173:11 A あたしーのほうかね、あげなきやいけないのに。 [F20]

6174:11 H <笑いながら> あたし Φ 韓国語やろうかな。 [F20] 【女性/雑】

【例 1】は意志を表す述語であり、「あたし」と明示しなくても、「やろうかな」の主体は話し手自身であるとわかる。主体がわかるにも関わらず「あたし」と述べているが、なくてもよいわけではなく、むしろある方が自然な表現である。「あたし」がある方が自然なのは、このような「あたし」が文の中で「主体」を示す、というだけではなく、「なんか」や「ていうか」のような話し始める際のきっかけの表現となっているからだと考えられる。本稿では、書き起こし資料を用いて、【例 1】のような無意識に行われるような話し言葉に特徴的な形式を含めて、ハダカ名詞を捉えていく。

3 本研究の立場

ハダカ名詞の談話機能を明らかにするために、本稿では以下のような枠組みでハダカ名詞を捉えることとする。実際に「無助詞」の用例を見てみると、助詞を入れても入れなくても発話全体の意味が変わらないと考えられる用例があり、そのような用例は助詞復元可能とみることができる。一方で、助詞を入れると助詞がない用例とは発話全体の意味が変

わってしまう用例もみられる。その場合は助詞復元不可能であると考えられる。両者の用例が実際に存在することから、本稿では両者が共存しているという立場をとり、考察する。

【表 1】 本稿におけるハダカ名詞の領域区分

ハダカ名詞	A「助詞省略名詞」 〔助詞復元可能〕 格助詞、係助詞「は」を省略して表現している (格助詞や「は」を入れても文全体の意味が変わらない)	B「無助詞名詞」 〔助詞復元不可能〕 対比や排他の 意味 を表さな いために助詞を使わないで 表現している (格助詞を使うと排他、 「は」を使うと対比の意味 が生じる)
	C「遊離名詞」 〔助詞復元不可能〕 名詞+「は」、名詞+「格助詞」とは別の 機能 を有するので、助詞を使わずに表現している (そもそも「は」や「格助詞」を使って表現することはできない)	

【表 1】で示したように、助詞復元不可能な表現の中に、二つの領域があるという立場で考察する。先行研究では「無助詞」という用語が頻繁に用いられているが、「無助詞」という用語を使うことによって、述語との関係性が弱いものへの連続性が見えにくくなり、分析が助詞を使った表現との比較に終始してしまうと

考えられる。先行研究でのいわゆる「無助詞」を、本稿では「ハダカ名詞」と呼ぶこととする。「ハダカ名詞」とは助詞を伴わず名詞がそのままの形で表出する名詞である。

本稿では、「ハダカ名詞」を以下の三つに分けて考える。助詞を入れても文全体の意味が変わらない、単なる助詞の省略と考えられる「助詞省略名詞」、助詞を入れると「対比」や「排他」の意味が生じるため、それらの意味を表さないために用いられる「無助詞名詞」、名詞+「は」、名詞+「が」とは別の機能を有するために助詞を使わずに表現する「遊離名詞」の三つである。

第 1 章 調査資料と方法

1 話し言葉と書きことば

「話し言葉」と「書き言葉」をどのように分けるのか、ということ考察した。「話し言葉」と「書き言葉」の分類を考えることは、調査資料の性質とその位置付けを確認するためにも必要なことである。本稿では5つの観点を用いてその分類方法を提示した。

2 調査資料

本稿では以下の資料を用いて調査を行った。

I 現代日本語研究会(編)(1997)『女性のことば・職場編』ひつじ書房

II 現代日本語研究会(編)(2002)『男性のことば・職場編』ひつじ書房

Ⅲ 国立国語研究所(2004)『日本語話し言葉コーパス』

Ⅳ 宇佐美まゆみ監修(2007)『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話(1)(2007年版)』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀 COE プロジェクト「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」

Ⅴ 宇佐美まゆみ(2007)『BTSJ による日本語話し言葉コーパス 1 (初対面・友人、雑談・討論・誘い)』「談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作」平成 15-18 年度科学研究費補助金基盤研究 B(2)(課題番号 15320064) 研究成果

Ⅵ 北川悦吏子 (2000)『ビューティフルライフ』角川書店 セリフの会話部分

Ⅶ 倉本聰 (2006)『拝啓、父上様』理論社 セリフの会話部分

3 調査対象語

①ガ格のハダカ名詞 ②ヲ格のハダカ名詞 ③ニ格のハダカ名詞

④名詞+が ⑤名詞+を ⑥名詞+に

⑦名詞+は (ガ格) ⑧名詞+は (ヲ格) ⑨名詞+は (ニ格)

【参考として】以上の①～⑨に間投助詞が付いた用例

名詞と述語との関係が格助詞の「が」で表せるもの、「を」で表せるもの、「に」で表せるものとする。これらを対象語とするのは、丸山(1995)にて「格表示の無形化は、ガ格・ヲ格・ニ格の格成分に起こる場合が、その殆どをしめる」と述べられているためである。「が」「を」「に」以外の格助詞で表せる関係が、全く「ハダカ名詞」で現れないわけではないが、本稿では「ハダカ名詞」の中心的な格関係を中心に記述する。

第 2 章 ハダカ名詞のあり方

第 2 章では、ハダカ名詞のあり方を明らかにするために、「1 ハダカ名詞の場面別出現傾向」「2 節の種類と名詞の位置」「3 深層格による分類」「4 述語の語種・種類別による分類」という四つの観点から考察を行った。

場面別の出現傾向については、ハダカ名詞の出現には改まりの度合いは勿論関係しているが、それだけではなく、言葉のまとまりが「やりとり」によってつくられるときにハダカ名詞が用いられると考えられるということを述べた。

節の種類と名詞の位置については、ガ格のハダカ名詞の場合には重要な要因であること

がわかった。ガ格の場合には、B類後続要素ありのハダカ名詞の集計が24%、B類後続要素なしが31%、C類が32%、主節が38%で、B類後続要素なしとC類はほぼ同じ割合だが、独立性の低いものから高いものへとハダカ名詞の割合が増えていることがわかる。

また、名詞の位置から考えると、①B類で後続要素あり・奥の用例が最もハダカ名詞の割合が少なく、②主節で当該名詞が発話の頭の用例が最もハダカ名詞の割合が多いということがわかる。小さい係り受けの方がハダカ名詞の割合が少なく、大きい係り受けの方がハダカ名詞の割合が多いといえる。ガ格の名詞は深層格によってハダカ名詞が不適格になることはないが、より独立性の高い節の方がハダカ名詞の出現率が高くなり、また、名詞の位置が発話の頭の場合にハダカ名詞の出現率が高くなることがわかった。

ヲ格については、文法的にはどの深層格でもハダカ名詞が出現しうるが、ほとんどが対象の用例であった。ヲ格については、先行研究では「ヲ格は格助詞の省略が起りやすい」という記述のみであったのに対し、ヲ格の対象を示す用法をさらに分類して考察した。ガ格やニ格に比べ、ハダカ名詞の出現率が高いが、「置く」「入れる」「付ける」など、場所のニ格が共起しうる動詞の場合にはハダカ名詞の出現率が低かった。それは、ニ格とヲ格と両方の可能性があるため、意味がとりにくくなるからではないかと考えられる。範囲規定については、文法的にはハダカ名詞が出現してもよいはずだが、本調査で出現した用例は1例を除きすべて有助詞の例であった。これには「意味のとりにくさ」ではなく、範囲規定の用例が「説明」であることが影響していると考えられる。

ニ格についてはそもそもガ格やヲ格と比べてハダカ名詞の出現率が低く、到着場所や存在場所を表す場合にしかハダカ名詞がみられなかった。ニ格のヒト名詞は助詞を使わなければガ格と間違いやすく文法的にハダカ名詞が出現できないのである。先行研究では、ニ格は到着場所（着点）の用法の時しかハダカ名詞にならないと述べられていたが、実は着点の用例は「行く」の用例が大半であり、目的の用法の場合でも述語「行く」の場合にはハダカ名詞と結び付く用例があり、着点というよりは「行く」と結び付く場合にハダカ名詞であることが多いということが推察された。

述語の語種・語構成による分類からは、漢語は和語に比べてハダカ名詞の出現率が低いことがわかった。同音語が多い漢語は、もともと書き言葉で使われることが多く、やりとりよりは一方的な説明で使われることが多いために、そのような結果になったのではないかと考えられる。

第3章 無助詞名詞のはたらき

第3章では、助詞省略名詞と無助詞名詞の典型的な例の抽出を試み、無助詞名詞についてはそのはたらきについて考察した。「①B類で後続要素あり・奥」の用例は、ハダカ名詞と「名詞+が」とが文体的な価値は異なったとしても、発話の「意味」は変わらない。このような小さい係り受けのハダカ名詞は「助詞省略名詞」の典型的な例であると考えられる。「②主節で発話の頭」のハダカ名詞は、すべてが無助詞名詞とはいえないが、「名詞+は」「名詞+が」との意味が異なるものもあり、無助詞名詞であるものもあつた。無助詞名詞は、やはり《文》の機能を持つ節の中で、主題として用いられているハダカ名詞であるといえる。

ガ格については、名詞の種類と現場性がハダカ名詞の出現と深く関わっていることがわかつた。発話の場にあるものを指す自称詞、対称詞、コ系指示詞、普通名詞、で無助詞名詞である用例が見られた。発話の場にはないものを指すハダカ名詞については、ア系指示詞や一部の普通名詞で無助詞名詞であると考えられるハダカ名詞が出現した。これらの用例から、ハダカ名詞が無助詞名詞であるのは、話し手と聞き手とが共有しているものを指す場合であることの可能性が高いと考えられた。そこで名詞が普通名詞で、述語が形容詞の用例をもとに検証を行ったところ、「新出・定」の名詞であるときに、無助詞名詞であり、やはり話し手と聞き手とが共有しているものを指すということがわかつた。以下のような用例である。

【例2】3531:08A 研究授業 Φ おかしかったのよねー。[F50]

3532:08A 図工の研究授業。

3533:08C あ、この、この前のあの、おっきい絵をかいたやつ。[F40]【女性/雑】

【例2】は3531の発話の前では学校の図工の話をしているが、研究授業の話はしていない。前の部分と関連はあるものの、用例のところではじめて「研究授業」のことが出てくる。話し手である08Aは聞き手と共有している「研究授業」について述べているが、話し手08Cが「研究授業」と聞いただけでは理解できなかつたと判断し、「図工の研究授業」と説明を加えている。その結果、話し手08Cもどの研究授業のことか思い出したという用例である。この例でははじめは「研究授業」と言っても聞き手に伝わらなかつたが、話し手08Aとしては共有していると考え、「定」の名詞としてあげていたのである。

用例部分の「研究授業」は新出であるが、「は」を使うと既出のように感じられ元々その話をしてきたかのようになってしまう、既出でないとすれば、他におかしくなかつた何

かと対比するような発話になってしまう。「研究授業が」と言ってしまうと、08Cが知らないことを話し始める発話になり、08Cの意図とは異なる発話になってしまう。

【例2】のように、その発話の場ではまだその話をしていないが、話し手と聞き手とが共有している具体的なものを指すときには「は」も「が」も対比や排他の意味を含意せずには使えない。「新出・定」の名詞を主節・発話の頭で使う場合は、ハダカ名詞特有の領域ということになる。普通名詞で述語が形容詞の場合、無助詞名詞は、その名詞が聞き手と共有しているものを新たな話題として導入するはらたきがあるといえる。

「談話」の場合には言語外にも話し手と聞き手とが共有しているものがあるため、新出でも「定」ということがありうるが、「文章」の場合、新出で定の名詞というのはそもそも出現しにくいものである。「無助詞名詞」は複数の言語主体で言葉のまとまりを作りだす「談話」特有の名詞であるといえる。

第4章 遊離名詞のはたらき

第4章では自称詞と対称詞を例として遊離名詞のはたらきを明らかにした。

1 ハダカの自称詞一言わなくてもわかるときに言う「わたし」の機能—

自称詞の場合、言わなくても主体が話し手だとわかるときにも用いられることがあり、それが前掲【例1】のような例である。これらの例の自称詞は言わなくても主体がわかるといっても自称詞を使った方が自然な表現となる。

上記のような例について、「言わなくてもわかるときに言う」ハダカの自称詞は、単に新規の話題を導入するためだけに用いられているのではなく、話題をはじめるきっかけの言葉として「なんか」や「ていうか」などのように用いられていることを述べた。発話内容が定まっていない場合には、フィラーのように「間をつなぐ」ために使われたと考えられる例もある。談話の場合には「わたしは」、「わたしが」で話をはじめるのはやや不自然である。話を始める場合には、「話を始める」ことを示す表現が必要であり、ハダカの自称詞は「話を始める」きっかけの表現としても使えるが、「自称詞+助詞」は「話を始める」表現にはならないのである。このようにハダカの自称詞は談話展開のために使われることがあるのである。

ハダカの自称詞の機能としてみてきた「ある時点から話を始めたり、相手と話している中で話題を転換したり間をつないだりする」談話展開の指標は文章には必要のないことで、交替を前提とした「発話」からなる談話だからこそ必要となることである。ハダカの自称

詞には話し手の態度を表す例も見られたが、内容を強調して聞き手に訴えかけたり、自分の意見を個人的意見として聞き手へ配慮を示したりするのも談話だから必要なことである。談話において、どの助詞をいれることもできないハダカの自称詞がみられるのは、いわゆる「無助詞」現象が複数の言語主体が言葉のまとまりをつくるという談話の特徴と結びついているからである。

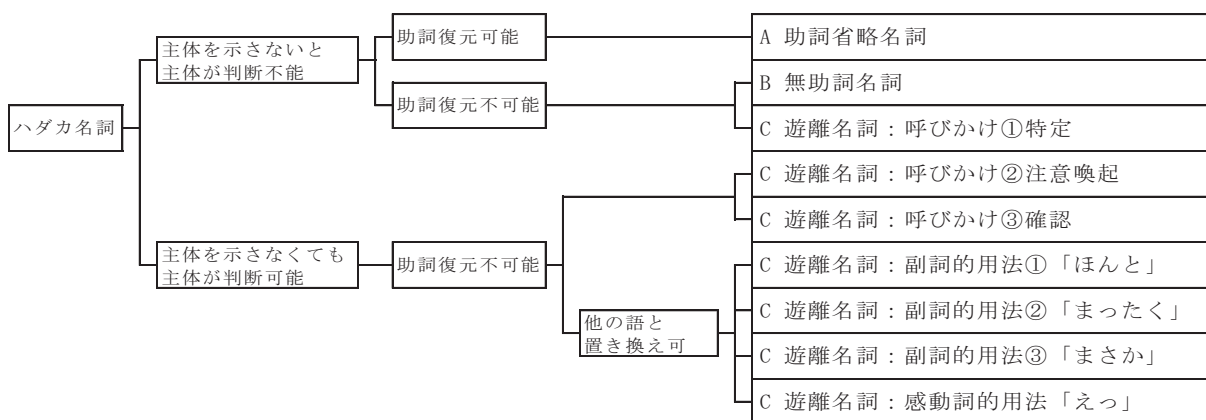
尾上(1996)では「情報価値はなく、ただつけているだけ」と述べられているが、構文上の価値はなくとも、わかっていることをわざわざ言うということは何らかの意味があるということであり、「わたし」をはじめとする自称詞には、主体の明示という構文上の機能のほかに、談話における機能があると考えてもよいのではないだろうか。話し手自身のことだとわかるときに、話し手が主体であることを表現するのは、主格の明示のためだけではないのであり、その場合には談話機能があると考えられる。

言わなくてもわかるときに「わたし」と言うのは、主体の明示のためだけではなく、そのような「わたし」が「談話展開」や「話し手の態度」を示すためにも用いられているからである。つまり「言わなくても」主体が「わかる」からといって、ハダカの自称詞がなくても良いわけではないのである。

2 ハダカの対称詞——「呼びかけ」の周辺——

対称詞については、述語との関係が「主体」の関係とみなせるハダカ名詞の用例について分類すると大きく分けて4つの用法に分けられることがわかった。A 助詞省略名詞、B 無助詞名詞、C 遊離名詞：呼びかけ、C 遊離名詞：副詞的用法・感動詞的用法である。

【表 2】対称詞のハダカ名詞の分類



C の遊離名詞：呼びかけ①特定は複数名で話しているときに一人を「特定」して呼びかける用法でそもそも「は」や「が」が使えない用法である。②注意喚起や③確認も呼びか

けではあるが、一対一で話しており、主体を示さなくても質問や依頼の表現であれば対称が主体であるとわかる用例である。あえてもう一度呼びかけて対称の注意をひいたり、対称の話であることを確認したりしている。

Cの副詞的用法・感動詞的用法は主体を示さなくても対称が主体であるとわかるが、対称詞が使われている用例で、「驚き」「あきれ」「程度強調」を表すなど、単なる主体を明示しているだけではなく、話し手の気持ちを含めて表す用法である。

AからCの用法があることから、対称詞には述語との結びつきが強く主体を明示するための用法から、述語との結びつきが弱い用法までがあると考えられる。述語との結びつきが弱いCの用法は談話ならではの用法であり、対称詞の「無助詞」現象が談話の特徴と結びついていることを示している。

ハダカの対称詞の副詞的用法・感動詞的用法といっても、まったく他の副詞や感動詞と同じ意味になるわけではない。対称詞のハダカ名詞の方が聞き手への働きかけが強く表されるだろう。自分が述べていることが本当なのだと強調したかったり、聞き手が述べたことにあきれたり驚いたりし、話し手の心情を表出するための聞き手への働きかけが強いときに、ハダカの対称詞が副詞的・感動詞的に使われると考えられる。

先行研究では「聞き手が主題の文」は「ハもガも使えない文」であると述べられているが、「呼びかけ」の可能性について論じているだけで、「呼びかけ」との関わりは詳しくは述べられていない。しかしハダカの対称詞の連続性の様相を見ていくと、主題とも呼びかけとも考えにくい、さらに述語との結びつきが弱い用法が見られた。そして、その用法は話し手から聞き手への働きかけの強い用法であり、談話に密着した用法であった。

先行研究ではあくまで「無助詞」が研究対象であり遊離名詞は「無助詞」研究には入らないとすれば、いわゆる「無助詞」現象を「無助詞」と呼ぶのは適切である。助詞の有無で説明できる範囲での検討だからである。しかし、いわゆる「無助詞」をハダカ名詞と考え、助詞がある場合との比較ではない別の観点から遊離名詞を見ていくことで、ハダカ名詞の談話でのはたらきが見えやすくなったのではないだろうか。

これまでの先行研究では論じられていない主題と呼びかけの連続性を見てきた結果、呼びかけにも入らないような用法があり、ハダカの対称詞は談話と密着したはたらきをしているということがわかった。

終章

1 本研究の意義

ハダカ名詞は話し言葉に多くみられる表現であるが、これまでの先行研究では構文的な分析がほとんどで、ハダカ名詞の話し言葉における機能についてはほとんど論じられてこなかった。しかし、話し言葉におけるハダカ名詞のはたらきを明らかにしなければ、ハダカ名詞の本質には迫れないと考えられる。ハダカ名詞の構文的な意味・機能だけではなく、談話レベルでの機能について考察したところに本研究の意義がある。

本研究では、自称詞と対称詞を例として、ハダカ名詞が談話展開のために用いられていたり、話し手から聞き手へのはたらきかけが表されていたりする様相を記述し、ハダカ名詞は話し言葉の中でも「やりとり」と関わる表現であることを談話レベルの分析から明らかにした。

2 今後の課題

①音声による話し言葉の分析、②書き言葉での名詞のあり方、③ガ格・ヲ格・ニ格以外のハダカ名詞のあり方などについては、今後の課題として取り組み、書き言葉も含めた体系的な記述をしていきたい。

参考文献

- 尾上圭介(1987)「主語に「は」も「が」も使えない文について」(国語学会研究発表会発表要旨)『国語学』150,48頁
- (1996)「主語にハもガも使えない文について」(日本認知科学会第13回大会ワークショップ資料)
- 加藤重広(1997)「ゼロ助詞の談話機能と文法機能」『富山大学人文学部紀要』27,19-82頁
- 黒崎佐仁子(2003)「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2,77-93頁
- 長谷川ユリ(1993)「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80,158-168頁
- 丸山直子(1995)「話しことばにおける無助詞格成分の格」『計量国語学』19-8,365-380頁

以上